



スイムを6番手でアップ後、リードバックでしっかりバイクのローテーションに加わり、世界のトップ選手と勝負できることを証明した高橋。WTS自己最高位



昨年日本選手権3位に入った岸本は初めてのWTS参戦となった。結果は33位だったが、トップクラスの選手とレースで得たものは多いはず



2017年から単身サンディエゴのエリートチーム「ザ・トライアスロン・スクワッド」に所属している高橋。今回チームメイトは7人出場し、2位のラパポート、3位のスパイビーも同チーム。「チームメイトは頼もしいですし、日々切磋琢磨してトレーニングしています」(高橋)

アメリカ時代再来。

Result | Elite WOMEN

- 1 ケイティ・ザフィアス (アメリカ) 1:52:12 (18:46/58:06/34:07)
- 2 サマー・ラパポート (アメリカ) 1:52:33 (18:47/58:03/34:25)
- 3 テイラー・スパイビー (アメリカ) 1:53:29 (18:45/58:04/35:19)
- 4 高橋侑子 (高士達) 1:53:38 (18:49/58:01/35:32)



近年の女子アメリカ勢の強さを象徴するレースとなった。今季3勝目を果たしたザフィアスをはじめとするレベルの高いオールラウンダーが2016年ぶりに表彰台を独占。また、オリンピック機運高まる今、終始トップ集団でレースを運んだ高橋侑子の4位もうれしいニュースとなった。

写真上/2016年の世界シリーズぶりに表彰台にはアメリカ勢が並ぶ。2位のラパポートは初のボディウムに、フィニッシュ直後からうれし涙が止まらなかった

れることになった。バイクレグを終え、素早いトランジションで飛び出したのは高橋。それにザフィアス、ラパポート、リアマンズ、スパイビーも即座に対応。1kmほどで先頭はザフィアスとラパポートの併走状態となる。その後方で3位争いをするはスパイビーと高橋。2組に分かれ、それぞれ優勝と表彰台を争う形だ。先頭を行くふたりは一歩も譲らない構想。ザフィアスに、WTSでの実力者、ザフィアスに、WTSでの表彰台経験のないラパポートが果敢に挑み、時に揺さぶりをかける。3位争いのほうはスパイビーがペースを引っ張り、高橋がその後ろにくらいつく。最終ラップまでもつれ込んだトップ争いだったが、終盤、折り返し地点の起伏を使ってザフィアスがスパイポートを駆け、ここでラパポートが遅れて勝負あり。経験値で上をいくザフィアスが今季3つめの勝利を手に入れた。高橋は最後でスパイビーに引き離され9秒差の4位となるも、自身にとってWTS最高位。今後に向けて大きな自信となったはずだ。

佐藤は22位、井出が26位、岸本は33位でゴール。上田はバイクで周回され失格となった。

ザフィアス「独走だった1、2戦目は全く違うような展開になった。良い経験になったと思う」

高橋「スイムからい流れで理想の展開でした。表彰台にはまだ力が足りなかった。皆さんの応援が力になると改めて実感しました」

TOKYO2020へ向けて、新世代の幕が上がる。

東京2020まで15カ月。各国エースがそろった今年の横浜。日本選手は男女で世界との差がくっきり分かれる結果となった。

取材・文＝東海林 実佳 写真＝小野口 健太
Text by Mika Tokain Photographs by Kenta Onoguchi

2019年ITU世界トライアスロンシリーズ横浜

2019年5月18日(土)・19日(日) 神奈川県横浜
Swim1500m/Bike40km/Run10km 水温22℃/気温21℃



「サマー(ラパポート)が後ろから追っかけて来るかと思って、フィニッシュラインまで全力で駆け抜けた。観衆にハイタッチする余裕もなかったけど、勝って良かった」(ザフィアス)

ザフィアスが開幕3連勝、高橋侑子は自己最高の4位

昨年の勝者、フロロラ・ダフィーが長く故障から復帰できずにいる中、第1戦アブダビ、第2戦バヌビュルダと2連勝し、抜群の強さを見せているのがケイティ・ザフィアス。加えてジェシカ・リアマンズ、テイラー・スパイビーら、シリーズランキング上位の選手も勢を溜めた。日本からは高橋侑子、井出樹里、佐藤優香、上田藍に加え、初出場、岸本新菜の5人が参戦。上田は第1戦アブダビでの落車事故の影響が心配される。

スイムはリアマンズが終始先頭を引く展開に。その後ろをザフィアス、スパイビー、サマー・ラパポート、高橋らがつく展開に。高橋は6番手でスイムアップし、スムーズな1区でのままバイクの先頭集団に入ること成功する。一方の井出は17位、佐藤は27位で、バイク第2集団後方からのスタートに。上田はスイムで大きく離され最後尾からひとりて前を追う苦しい展開となってしまった。

バイクレグではザフィアス、リアマンズ、高橋ら7人が先頭パックを形成。選手たちは先頭を交代しながらハイペースを維持し、周囲を追うことにチェイスバックをじりじりと引き離していき。当初は15秒ほどだった差が、バイクレグを終えるまでに2分近い大差に。勝負の行方は先頭の7人に絞ら